

〔書評〕

二本松泰子著『中世鷹書の文化伝承』

中澤克昭

鷹書と総称される書物群が、古典知の一大ジャンルであったことは、『群書類従』に「鷹部」があることひとつをみてもあきらかなのだが、近代以降、文学も歴史学もこのジャンルを冷遇してきたと言わざるをえない。ようやく近年、この未開の沃野が本格的な調査・研究の対象とされるようになってきた。そして今、最も精力的に鷹書を調査し、論考を発表している開拓者が二本松泰子氏であることは、衆目の一致するところだろう。二〇一一年、その二本松氏（以下「著者」）の単著『中世鷹書の文化伝承』（以下「本書」）が刊行された。略目次をあげておこう。

序章

第一編 公家の鷹書

第一章 西園寺家の鷹術伝承―『西園寺家鷹口傳』をめぐって―

第二章 政頼流の鷹術伝承―『政頼流鷹方事』をめぐって―

第三章 下毛野氏の鷹術伝承―山城国乙訓郡調子家所蔵の鷹書をめぐって―

第四章

下毛野氏の鷹書―他流儀のテキストと比較して―

第二編 東国の鷹書

第一章 諏訪流のテキストと四仏信仰

第二章 諏訪流の鷹術伝承（一）―「みさご腹の鷹」説話の検討から―

第三章 諏訪流の鷹術伝承（二）―「せいらい」の展開と享受―

第四章 宇都宮流の鷹書―『宇都宮社頭納鷹文拔書秘伝』をめぐって―

結章 中世鷹書の展開―越前国朝倉氏の鷹書をめぐって―

《資料紹介》宮内庁書陵部蔵『啓蒙集』

あとがき／初出一覧／索引

本書の魅力は、これまでほとんど調査・研究の対象とされてこなかった鷹書を読み解き、そこに含まれる興味深い説話類を紹介し、さらにそうした説話類を紡ぎ出した知のネットワークを探っていることにある。日本中世史研究の立場から狩猟文化に関心をいだいてきた評者も、このような書物を持ち望んでいた。

第一編第一章では、『古今著聞集』にみられる「みさご腹の鷹」

説話の類話が『西園寺家鷹口傳』に記載されていること、その説話は信濃国の諏訪社に奉仕した柵津一族の鷹術を伝えるとされる柵津流の鷹書にもみられること、『西園寺家鷹口傳』は鷹狩の由緒を諏訪に求める記述や諏訪の神事に関する記述も含んでいることなどがあきらかにされる。そして、『西園寺家鷹口傳』の尊経閣文庫本に応長二年（一一三二）の奥書があることから、すでに鎌倉時代にはこうした西園寺家の鷹書を媒体として京都においても諏訪信仰が隆盛していたと指摘する。

評者はかつて「鷹書の世界」（五味文彦編『芸能の中世』所収）という駄文で、室町・戦国期の鷹書に諏訪に関する言説がみえることに着目して、京都に諏訪信仰が伝播したのは、諏訪（小坂）円忠が『諏訪大明神画詞』を編纂し、京都の諏訪社の神事も確認できるようにする足利政権下のことだったのだろうと論じたことがある。恥ずべきことであるが、これは諏訪信仰に関する先行研究も消化し切れていないまま草したもので、間もなくみずから認識が誤りにあることに気付き、いずれ自己批判・訂正をしなければならぬと思っていたのだが、本章によって拙論は明確に否定された。しかも、ほかならぬ鷹書によって、鎌倉時代の京都における諏訪に関する言説の流布が証明されたのである。

つづく第二章では、「政頼流鷹方事」をとりあげ、そこに鷹飼の元祖を「三条西家の祖」「政頼」とする興味深い伝来説話のみられること、ここにも「みさご腹の鷹」説話がみられることなどを確認し、西園寺家が所蔵する政頼流のテキストが、いわば「三

条西家流」を標榜しており、それでいて諏訪流・柵津流の言説も取り込んでいるという、複雑な実態をあきらかにしている。下毛野氏の後裔調子家所蔵の鷹書を採る第三章では、神事における独特な鷹の作法から下毛野氏と散所との関係を予想するが、あわせて考察されている「三本足の雉退治」説話も面白い。同説話はいくつもの鷹書に類話が見え、狂言にもとりこまれるのだが、惟喬親王が在原業平とともに登場したり、渡唐して鷹を習得した保昌が登場したりと、奇想天外である。

第二編第一章では巻末に翻刻される『啓蒙集』を手がかりに、鷹の本地を普賢・観音・不動明王・毘沙門天などとする、いわば中世神話の一類型と言うべき説があったことをあきらかにし、第三章では伝説的な鷹匠「せいらい」の伝承の有り様、とりわけ「柵津神平」との関係を探り、第四章では平野氏という宇都宮社の神事を支えた一族と鷹をめぐる伝承との関係を描き出す。これから第二編の論考で分析されている鷹伝来説話の面白さも特筆に値しよう。渡来地を「敦賀之津」とする鷹書が少なくないことは、中世の対外関係や交通を考える上で示唆に富むが、鷹の起源を「摩伽陀国」・「唐」・「百済」などの国々に求め、渡来した人や伝授された人の名に様々なヴァリエーションがあることも興味深い。中世には、戦能や芸道によって異なる多様な世界観や始祖伝説があったと考えられるが、こうした鷹の起源説や伝来説は、そうした中世的な知を伝えるものとして評価されてよいだろう。

このように、瞠目すべき知見に満ちた本書だが、いくつか気に

なる点もある。

第一編第一章で、西園寺家の鷹書が諏訪の鷹術に関する記述を取り込んでいる背景として、同家は「鎌倉時代、関東申次を世襲していたことなどから、東国の諏訪文化について知識や情報を取り込みやすい状況にあった」と指摘しているが、それだけでは不十分であろう。評者も前掲旧稿執筆時には認識不十分だったのだが、軍神としての諏訪はすでに『梁塵秘抄』にもみえ、『平家物語』諸本には住吉とならぶ軍神として諏訪がとりあげられている。モンゴル襲来の頃には、東北から九州まで諏訪社の分祀が確認でき、諏訪信仰はいわば全国的な展開をみせていた。評者は、応長二年の奥書をもつ『西園寺家鷹口傳』は西園寺実兼の著作であった可能性が高いと考えているが、その頃には京都においても諏訪はよく知られていたのであり、この時期の諏訪信仰を単に「東国文化」とすることはできない。

第二編第二章で考察されている、「みさご腹の鷹」説話と信濃国の非持の関係もいかなるものであろうか。非持が鎌倉時代から諏訪社の神領で、しかも御狩の神事と関わる土地であったことから、本来、「みさご腹の鷹」説話は、「諏訪の信仰文化圏である非持の在地伝承で」、「それを『古今著聞集』では、諏訪との関わりを明らかにしないまま、「非持の檢校豊平」の説話として採り込んだ」のであり、『啓蒙集』や『才覚之巻』において、みさご腹の鷹説話が始祖伝承として取り上げられたのも、そのような在地伝承と連動したものだとする。非持が諏訪と関係が深い土地で

あったことはたしかだが、だからといって「みさご腹の鷹」説話が在地伝承であったとは言えないだろう。「みさご腹の鷹」説話の初見は京都で成立した『古今著聞集』であり、その内容も京都を舞台にしたものである。重要なことは、『古今著聞集』が中世・近世によく流布した書物だということ、著者が非持の様子を探る手がかりとする『木の下蔭』や『伊那志略』といった近世の地誌類がことごとく典拠として「著聞集」をあげていることはその証左である。系図類や地方の伝承にまで影響を及ぼした『著聞集』の力を認めなければならない。

そして、本書全体で問題なのは、流派名をアブリオリに用いていることである。序章の「諏訪流と宇都宮流といった多様な属性を持つテキスト群」にはじまり、本編でも「瀬津流」「西園寺流」「公家流」など流派名が頻出する。ところが、必ずしも各流派の成り立ちについて説明されているわけではない。「大宮流とは」と説明されている場合もあるのだが、その典拠は『柳庵雜筆』のような近世後期以降の書物であるため、中世にさかのぼって考えることができない。「諏訪流の鷹書には、諏訪明神への信仰に関する叙述が多少なりともほぼ必ず記載される」というように、○の流の鷹書には必ず○の流に関する言説が含まれているはずだ、という前提で論じられているようだが、その確証がない。

流派とテキストが不可分の関係にあったことはたしかであろうが、言うまでもなくテキストも流派も構築されたものであり、それぞれの構築過程が問われなければならない。先述のとおり著者

は、西園寺家の鷹書のなかにも諏訪に言及するものがあり、宇都宮の鷹書のなかに京都で成立・流布したと思われる鷹書とよく似た記述がある、といった重層的で入り組んだ実態をあきらかにしている。そうした実態の確認は、流派の構築過程の解明にも資するはずなのだが、アブリオリに流派名を用いて論じてしまっているため、結局、流派とは何なのか分からないままだと言わざるをえない。

例えば、持明院家は西園寺家とともに「公家流」の鷹書を相伝した「鷹の家」とされている。近世に「持明院」と冠される鷹書が多数出現することはたしかだが、拙稿「公家の「鷹の家」を探る」(『日本歴史』七七三) および「持明院基春考」(藤原良章編『中世人の軌跡を歩く』所収)であきらかにしたとおり、持明院家は十六世紀に他家の鷹書を集積し、鷹道伝授を行うようになっており、十五世紀以前に持明院家が「公家流」の鷹道を相伝していた「鷹の家」だったとは考えられない。

著者の論じ方を象徴していると思われるのが、本書で頻繁に用いられている「属性」という言葉である。「属性」は、「事物の基本的な性質」、「実体に不可欠な本質」といった意味で用いられ、「偶有性(偶性)」や「様態」と区別・対置されるのが一般的である。本書で著者があきらかにしているのは、まず個々のテキストの「様態」であり、(今のところ多くは)「偶性」として説明されるべきテキスト間の異同にほかならない。ところが著者は、「テキストの冒頭に掲載されている鷹の伝来説話は、それぞれの

属性を象徴する」というように、各テキスト固有の「属性」として流派があるかのように論じてしまっている。後世に構築された流派をテキストの「属性」にしてしまつては、議論が混乱するだけでなく、流派を所与の前提とする、ある種の本質主義だと誤解されかねないだろう。

中世期において多数製作された鷹書類は、京都の公家流の特性を持つものと、東国すなわち諏訪流の流れを汲むものとおよそ大別できる。ただし、諏訪流のテキストについては、信濃国の諏訪大社に奉仕した禰津一族のそれと、大祝家の分家である在京諏訪氏のそれとは同じ伝派でありながら異なる伝承を持ち、さらにその属性を細分化できる。これらの伝承は複雑に絡み合いながら種々多様に展開し、近世期になると属性等を無視した無秩序な伝承が混在する鷹書類が膨大に生産されてゆく。

著者は結章でこのように述べているのだが、流派「属性」論が著者自身を束縛しているからか、本書がとりあげたテキストの豊かさに比して、この整理は素朴すぎる。本書であきらかにされている鷹書の実態は複雑で、「公家流」「諏訪流」に「大別できる」とは思えない。そもそも、「公家流」とは何か、「諏訪流」とは何かが明確ではない。また、私たちが目にしていく鷹書の多くが成立する前から、「伝承は複雑に絡み合いながら種々多様に展開」していたはずである。そして、題名に「○○流」や「△△△家」などと冠する近世写本の膨大さが如実に物語っているとおり、近世

こそ流派という「属性」が希求された時代であったと言えよう。

本書刊行後も著者の精力的な調査・研究は続いており、結章で今後の課題とされた京都諏訪氏と鷹書の関係も解明されつつある。また、韓国国立中央図書館所蔵の『鷹鶴方』を翻刻・紹介し、中東で開催された鷹狩愛好家の世界的なイベントで各国の鷹匠と交流するなど、その視野は海外にもひろがっている。今、誰よりも多数の鷹書を知っている著者には、自縄自縛に陥ることなく、これまでに鷹書そのものの可能性を追究し、その魅力を発信し続けてほしい。

（三弥井書店、二〇一一年二月二日、三五四頁、定価七五〇〇円＋税）

（なかざわ・かつあき 上智大学准教授）